

先進繡像玉石雜誌

信

二五
十

香外書局

史傳載紀

新刊

		和書門	
一〇冊	二架	一三九函	四三五五號
		類	

庫文閣内		和書	
五八函	一一架	四三五五號	一〇冊
		類	

内閣文庫			
番號	和	43555	
冊數	10	(5)	
函號	158	209	



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



先進繡像玉石雜誌卷第九目錄

贈從三位藤原為子真景并傳

御子丸

賀茂神主氏久

典侍

萬秋門院瑱子

一宮尊良親王

賀茂川水位

皇后宮御匣

式部少輔英房

姨を妻と以

依々木時信六角乃家

對乃屋

禅林寺

宗良親王

八王子

赤山

唐勝合戦

一品法親王乃娘

南都合戦

白輪湊

濱名摺地理

今切

六谷寺

欣子内親王

瓊子内親王

女御三位

淺草文庫

先進繡像玉不雜誌卷第九目錄終

贈後三位藤原為子真影 古摹本



信亮手寫

九ノ目

贈從之佐藤原為子乃御子元大納言為世卿乃女若里母ハ
賀茂神皇氏久女弘安七年御子元乃家あくは誕生あり
御子元乃家と云は拾芥抄ハ三条坊門南大宮東兼明
親王家長家卿傳領之とあり兼明親王ハ延喜帝乃皇
子初源氏あかせ世終ひり承平二年十九歳あくは從二位
上あ叙り同三年攝廣推守あ任り天祿二年又十七歳
あく元大長あ進之終ひけは後世人御子乃元大長と
云義を以つ御子元と稱せり形り貞元中元大長を止め
あかさせらせたりはたる兼明親王御兄盛月親王乃女
を養ひ御堂関白道長あ乃はまく藏人乃少將とけけは
之は堀とかさせては以て家を讓らせ親王ハ嵯峨乃龜あ乃

側あ小あ教あ作りくは佳き終ひ小あ御堂教乃次男堀川教あ
二男長家卿あ以て家あくは誕生あり長家卿此家を傳へ
領り玉ひ次男大納言忠家卿あ傳へり推中納言後忠卿
皇太后宮又は後淑卿推中納言定家卿推大納言あ為あ家
卿推大納言あ為あ氏卿大納言あ為あ世卿あくは八代相承あり
若里賀茂神皇氏久女續子載集あ玉ひ河は乃は流を
見く從三從氏久
散花乃は彼を岩根了吹去くは風あそはゆさ玉ひ河乃水
色深くり川あまく狩人乃は狹くくは萩乃朝あ
と云款を載らせり人あり
後二条院即位乃は先典侍あ系玉玉ひける不至上款を

好まをよめりし御寵をく他了矣あり

典侍ハ職負合了に人掌ニ尚侍了同一尚侍ハ二人供

傳檢女端内外命婦の朝冬及ひたら奏請宣傳をる

禁内祿式を兼知を掌るとあり

之を得せれ君尚侍あり時々奏傳宣傳を得と

云職原鈔ハ上臈是非を謂以二三位典侍を云赤青

色を着く御陰膳了候を分あり是等乃職了補を以一

く色を聽と新く冬大長乃女或大長孫也分と之

續子載集ハ赤元百首款なりと之花を

螢を

今まままままあく花乃伴たり乃ふの之孫乃まる雲

紅葉を

大外河室子ゆ持るやあま火了あるぬる款の思ふ院

立田川水乃秋をやいくらん紅葉をさ替入嶺乃嵐わ

哀秋乃申ふ

枕たり知て入之乃あくゆか人目をりをせりく法まん

迷懐乃心を集了載らる

秋乃浦ふたよ入波乃名計をかけく真愛乃有以之去

又同院位了おす一浦一ける時人ふめせれ一三十首款乃申ふ惜

名哀と以之を
もらぬまふ意一かくやと分入まる命不増るうま名あまる色

不慮之憂

何れかへとおあり世まくりぬるる契なき必と難面うる境
然るる後醍醐天皇いまく帥宮と下ける頃いらかふ玉簾乃
間求めむひけん思ひくく御消息乃數つそりけきハ遂に宮
み系里そめむひ徳治元年男御子生せむ入何とを憚せ
らせりや吉田定房後内膳長兼養君みふくあらしをくれハ
彼亭み移ら勢らせけるうけ御子三歳みあらまひける秋
後二条院崩御あうく花園院即位す備一帥宮東宮ふた
せむひ一の典侍ハ大納言の局とく春宮了侍をせけり其
翌乃年八月二日葛蒲みはけく万秋門院乃中一人大納言
乃局

そふらくうむりそひけり昨日より社乃浮ぬり控也ハその次
とありけお返一万秋門院

吾のこむりそひけり社乃正了く人そりそねを又そ添けり
とそ是を後二条院乃御事を思召いそくあうへ

萬秋門院後原瑱子尊卑を厭了瑱子とあり今考ふ字
此の是ハ圓明寺攝政書不瑱字あり後原親國了瑱子ハ
社父内大臣具守公乃家了おろし海けお頃御免し初

らせけかろ後二条院ハ延安八年降誕より永仁六年御年
十にみく御元服さく堀河乃内大臣乃家了

出さし備一嘉元二年三月尚侍了あきせく後三位了叙
せらる後二条院十九徳治二年八月廿二日後二条院
崩御乃後尼とあり勢あ入瑛子後醍醐天皇即位あり

て元應二年二月廿六日唯之辰乃宣旨乃後萬秋門院
と中以年六十三延元二年三月薨終年七十一

正和元年より男御子誕生より由とこれの妙法院より入室有
て後み天台座主尊澄法親王とやせり還俗ありて宗良

親王と中是あり娘御子二所欣子内親王瓊子内親王とて
おとよせり御産乃年未定りあり

一宮ハ總角乃頃より螢雪乃力怠慢きと人挂乃枝小
折り難うて見せさせむひけ色の後醍醐天皇御位乃

ちめけ宮を東宮ふと敬慮小人望中同一か里けると思
乃外園東乃計らひとて邦良親王坊より居せむひか

ハ一宮の御方様乃人ひとへり轅魚乃おひをあげけるふ
宮を偏ふ風月乃懐を暢之花鳥の心を澄しめ坐すける

嘉暦元年御元服ありて之品に叙し中務卿に任し給
ふと云とも於北白河乃御所におくはる瀨見乃小川乃浸

溪尔嗽き月待ふ乃月影をせり乃祿ありてみみ明暮
をせ給ひける子関白左大臣

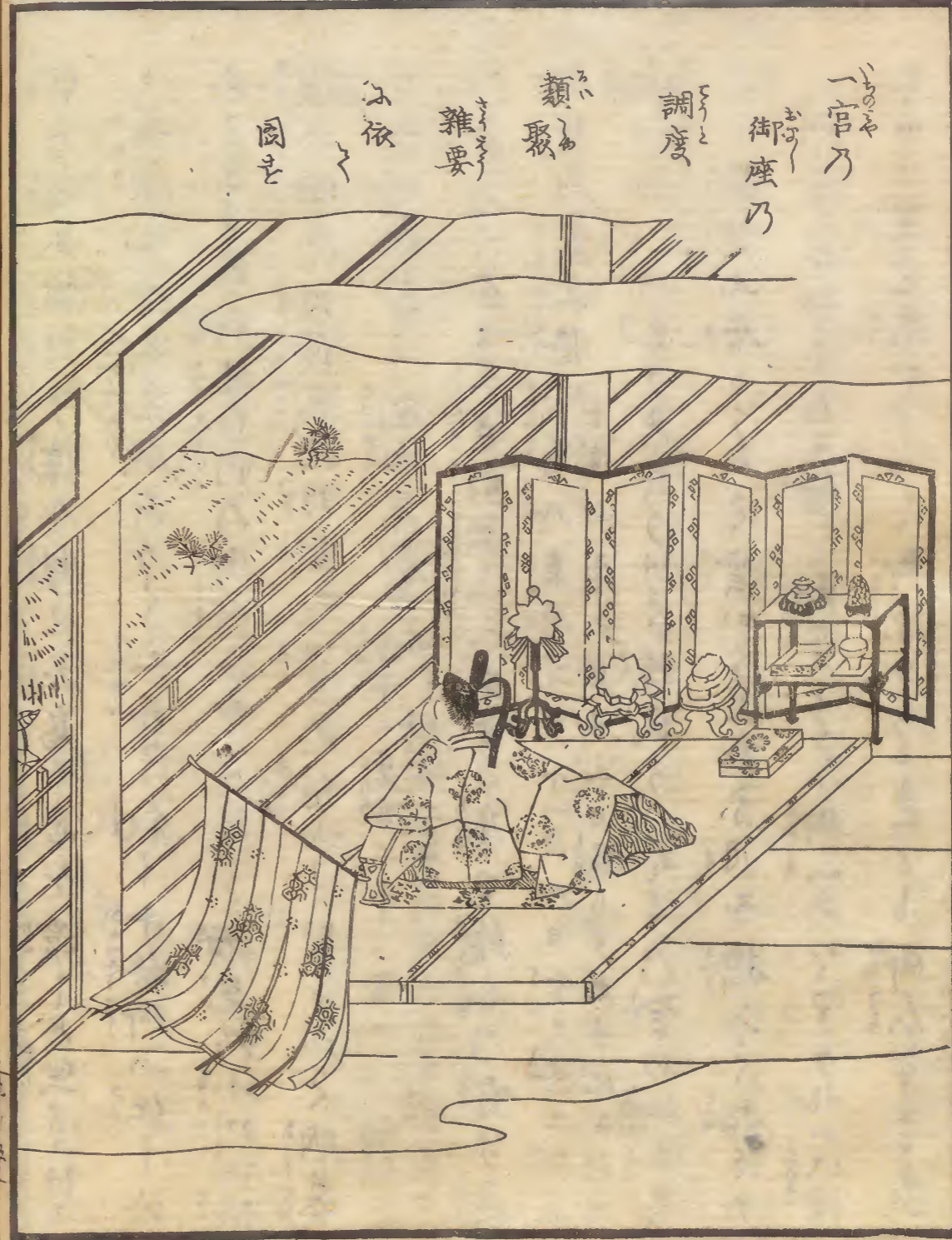
乃家よりかまよき教教上人あまて集里繪合乃有ける時
洞院乃右大臣

将とある乃出させたりけり源氏より擡く乃宮の御女も
おし楨柱に居るくれり雲かくたふ月を撥めく招きた

るけりをわきたる繪を御院より御人より里々れり繪
をり置也巻かへり御院せらる也と御人なるきま



信光寫



一宮乃
御座乃
調度
類聚
雜要
依
圖

言と笑と人々を愁殺とと武帝乃歎きあひ一昔倍我の
繪みかけか女を思く徒み心を動さる如しと紀貫之の僧
正遍昭を難せし御身乃とみ思とせせ免く御心やら乃
方りやと賀茂川合の宮へ詣くせ給ひ御手洗川
茂井上神社乃下より涌出る清泉ありホクトメイトルを以て
水乃性考ふ京都中乃水是より清烈なるあり
試る其次第を云へし此泉よりホクトメイトル
寸七分清水寺音羽乃龍の一寸七分六厘孫五誕生水
及び是井水一寸八分又美濃國可兒郡議坂一
清水一寸七分同國加茂郡勝山村清水一寸八分同國下
國筑摩郡妻籠一寸九分同國所温泉一寸九分強江戸神田
諏方觀音前水一寸九分同國西乃井一寸九分強江戸神田
我家の井泉一寸八分酒乃清一寸四分
水性乃善し流るる少く悪乃河水を御手水了結
是河とあく川は道遠せ勢多し乃夜は為世卿乃御

子虎乃家了渡らせよる魚をよる一糸を西へ過させ玉
ふとく今出川乃邊ふ垣よ草むく毛り松生年久下く往
荒れた家宿乃物もよとよ不撥音けくく青海波をそ彈
たるあやうやいろ形か人からんと通るのく御車を止めさせ
遙ふ見入させ給ひては年乃知と二八許か女房乃云
許あく艶麗か女房乃秋乃別色の惜まれく雲間乃月を招く
みくそ有けるはくくと御覽せしめ此日頃御心を腦せし
たか繪いたく女房乃寫繪あまと思召せくはくせ海と
思とせよとよさくら御言葉ふ出せしめけるを常ふ御會
了系里玉人二条中将為冬は快く賀茂乃御かへるや
乃不乃くあまの宵の間乃月又も清境を海不く思

めさ新くふや其事ありハ最安きてふく出持依る宛
止彼女房乃終云をくりく尋てひへハ今出川右大臣公
顯後西園寺大相國實兼公三男後醍乃娘みくひか子を
徳大寺乃九大将清み中か治げかういさく皇后宮
後京極乃御匣みく候か子御匣ハ今乃御納切み忠臣
院徳子ひちく款の御會ふやよきく彼亭へ入をまひくまこれの
ひまふも自御んあうと久しとふくひへりとやせハ宮
例あり守所んあけふ打笑まひやうく今款其亭あり
あう龜ん乃所會あうへくと右大臣乃方へ作おませ
くせは公顯元亨元年二月八日薨一宮十六乃歳みく
云顯云龜徳大寺朝清卿十歳おま皇嘉暦年とせれハ
あう久くわくしけあくと取まう久きて數寄乃人數多

集里くかくと案内中をハ宮為冬をりを所供みく彼亭
へ入をまひぬ款乃この今夜さまうく乃所奉意あう孫の
たく披講をりふく寝殿をあう主乃大臣小動乃いそさ
あうく土器めく案つた色ハ宮常より由興をまをまひ
野曲絃歌乃妙々了御益給せまひた色ハ主もくく辭取
ぬ宮由御枕を傾けせまへハ人か静まりく小夜も御
更みどりあつち媒乃左中納人あうく醉さうく色ハ其案内せ
させく彼女房の住けか西乃對へ忍ひ入せまひ曉も承
せ語らひまへと由女々御いへもやきく一向難面くも
てかう案らせく色ハ御んハうりを留めまうく立か危ら
せまひぬ其後のたうく御消息ありくいつく子来ふも

ありぬらんと覺ゆるはけり積里乃色ハ女ハ哀まか
方了んひるきく昇進ハ降る猶舟乃否りのあり以と
思へるけしきりかん顯も色たりのされと由於互人目を
中乃関守あかしく月頃過させむひけるふ武部少輔英
房文章博士後原明衡朝臣七代乃孫文章生長英乃長兄
英房英房か王文保二年四月十四日遊仙窟乃跋書たる人
と云儒者御文談了集し貞觀政要を讀けか唐
太宗鄭仁基の娘を納んとせしを魏徵諫くけ娘まてふ
陸氏了約せりとせしを太宗宮中入召ることを止む
ひきと談しけかを宮つくと閑召く我ハハあまの
乃云あつけし事定りたあ中をせけんとい計りけるや
と頼子慟も多御文も書絶させむひけか了徳大寺

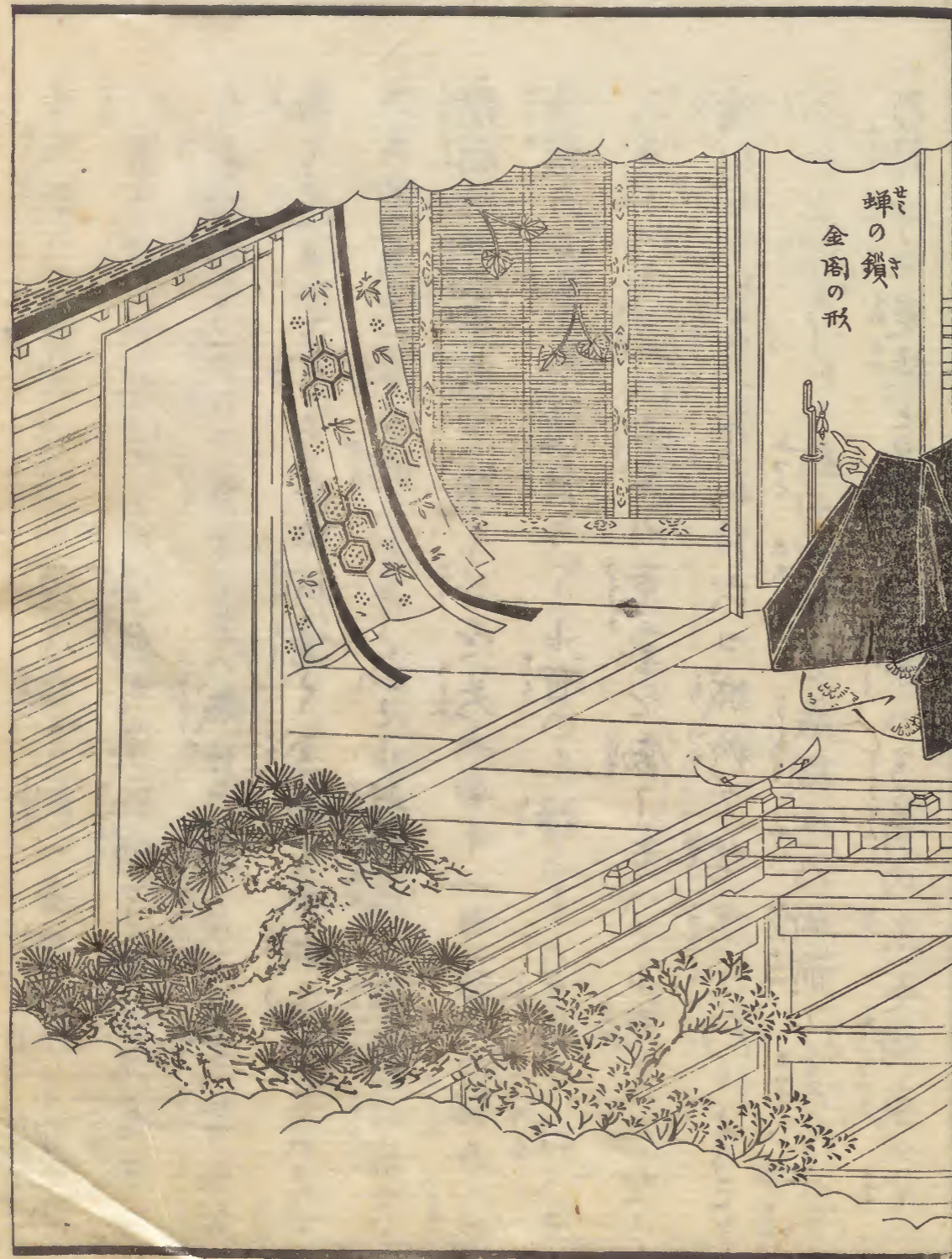
此事を聞及ひ今出川家と離別し中園相國公賢云
乃息女ふ通ひけか世閑多けし官ハ冷ハ御憚かくいせ
ねき御文乃ありしあいつより黒を止ま
糸をたや塩屋く浦乃畑たよとぬ風了靡くからひを
女中餘里ハ難面ありん乃と我あ多憂めふと返ま
ふかん成りけし色ハ詞ハかく
立ぬへき浮名をのねくともハ風ハ畑乃あひらきや
其後よりハ彼方此方ハ結ハおろ後ハ乃下紐赤とけく
まよ乃枕を川島乃水乃んも浸くぬ御災あき男御子一
人おろ海つれし御匣教く不と由かく病ハ依くうせ
まハハハ暫時ハ歎了義ま海けりふ又大納言典侍

とく推大納言為世卿乃末乃女乃ありけるも通ひく女
王一所産せむ人尊良親王乃母の妹也即外戚の
るへきみあらは然也と云ふ二系院乃中宮高松院とヤ
せし鳥羽院乃皇女不二系院の父亦伯母不元弘元
後深草院乃中宮東二系院も母方乃叔母あり元弘元
年八月笠置へ潜幸乃時宮も同く約啓ありけ共
一川城子終らせむん謀かきりぬと思召也宮ハ
何内國へ打向とせむハ捕ら未坂乃城へ入御す海奴
強多う笠置乃城落せれ主上大秋路へ潜幸ありぬと
聞きかば宮ハ御迎乃ため南都をさし打立せ玉
ふと云と云主上も平等院へ入せ玉ハ同食く宮
也京へ還御せむハ六波羅乃仲時北条義時益北条義時益
後守

議とく佐々木判官時信備中守頼綱六男也里太郎
乃六角東洞院乃家屋敷と云其後時信乃領とあり
前建仁の頃武藏守頼雅ありけ其後時信乃領とあり
つとむ此流を六角の左と本と稱す四方一町の地あり
不止免置おあり二年三月七日主上隠岐島へ遷幸か
りしハおあり八日宮を土佐國へ移居せ玉ハと云
堰とむかふと云ふと云ふ流ハく流る浮也あらん
十一日乃暮れと云ふ兵庫了善むハ京より兵庫へ是より御舟
みめく土佐國幡多乃郡有井三郎光衛門尉ハ許へ渡ら
せらむと云ふ同二年四月十五日の浦よりけか
主上隠岐島より還幸ありけ海心公家一統乃王化ハ
服せハは宮も有井を御供ふて去給せさせ玉ハ元弘

如く一條堀川乃御所了 乃地なり 歸入せよひけ分了
程なく建武乃亂起 皇足利尊氏官を止めら終 追討の
宣旨を下せしむ 官を止將軍と 新田義貞朝臣を副
將軍とあせし 既小都を進發ありく 三条河原を過せ
せよひけるとき 御旗了 けり 日乃紋地小落
けああ勢ありきあせ せよと 小矢網 鷲坂手越乃軍小
打勝よひ 帝色の中書王乃御手乃兵志あり 小勇敵を輕
志く 竹下乃軍小利を失せし 遂了 都へ引返せり 斯
里かハ 東風志あり 吹競ひ 至上 山門へ 臨幸あり
後臺夷夏を 猶皇宮 鳳樓之 池魚乃 災小 罹造營乃
沙汰いさく 遂せり 至上 二夜 台嶺了 鳳輦を 廻され

華澄 旨焦土とあり 里つと 八宮中 東塔子 登里く 口明乃 巔
子 奇正乃 兵機を 練調あり 色く 公と 小 聖運時 至ら 以く
六軍 和生 以 主上都へ 還幸あり 八宮中 東宮を 補充
志く 義貞 義助 以下 乃 官軍を 駈く 北國乃 雲入 鞭と 揚
り 越前國 敦賀郡 金崎乃 城入り 是ハ 氣比 大官司
の 築たる 城あり 山門より 縮川ハ 二里 縮川より 和太ハ 二里 和太
律より 二里 半あり 越前國 山門 至り 山中より 金崎ハ 五里 合せ
て 廿四里 あり 松大津を 經く 則律ハ 十一里 半 貝
と 麻ノ 貝律より 塩津 柝ノ 瀬 橋市 中河内を へく 木目峠ハ 十
一里 木目峠より 金崎ハ 二里 半 遠く 九里 程ハ 十里 餘 乃 路を 日
おせら 敷く といふ 一日 八十里 餘を 經 せら 敷く といふ 其ハ
七千 餘騎と あり 九之 萬人 千人 許 あり 今 代 道 を 過 ぐ 難
入 難を 推量 あり 此 中國 中へ 披 露 あり 仁
木 賴 章 高 師 泰 大 勢 あり 押 寄 即 ち 色 を 十 重 女 重 小 園



蟬せみのひら鑽き
金かね閣かくのか形かたち



今いま出で川がわ第だい
西にし乃の對たい

く攻戦入勝負の時乃運了依く糾へ糸繩乃如く甲乙の
結と難うのいとも巖然た系孤城了後援乃義勢亦
く籠城僅了百回不餘了けさの城中乃糧忽不盡了軍兵皆
飢了泣めり宮去也を固食く今をたや我打死しと時
不去也あも命を惜みあ孫とよ此城落く我等自害さハ
諸國乃官軍氣を殞く力を失入急一日少くも怖あハ又
後援の遲奏を待付るに由有く糧つさハ馬を惜へさ
不あふいと宣ハ士卒乃勇氣を勵く五へと也既了馬を
喰けり延元二年二月六日城終了落寄手門をよりこ
入ぬと聞えり新田越後守義顯宮乃御前了来り合戦
乃候今ハ是速と見えり其ハ弓箭の名を惜家入生れ

ていへハ自害仕らんきるふくハ上候乃市事ハたとハ敵
乃中へ市出ハと由失ハ糸らさ海まくのこのよ由ハハ只
かやふく市海あふべくと去を存ハハとヤされり也ハ
年十八其言勇烈実官御快けみ打笑ハ主上京都へ
不勝家乃器と云へり還幸あ里一時我を元首乃將とか一汝を股肱乃長たら
去む股肱あくく元首保ことを得へんや去ハ我ハ汝と
共子命を白刃乃と了縮め怨を黄泉乃下み報えんと思
あ里折自害をはハ上候了あくるる記者そと仰らせられハ
義顯感涙をくさへく斯様ハ仕る者少くハとヤ果ハ刀
を抜く逆も取直一尤乃服了突立右服乃肋骨二之
枚けく搔傷其刀を抜く宮乃侍あ了さく魚俯伏

みありくそ死ふけあ宮やく其刀をめされ御院止る柄
は血あまうて薄ら色ハ御衣乃被く刀乃柄をさう
押巻をよハ雪乃如くか御膚を露一御胸乃邊み突
義顯の枕邊らふ勢あ御年廿二頭出まの房
行成卿十一代の孫藏人頭みく右京里見大炊助時義
大夫あを以て頭大夫と云か里
武田餘一氣比弥二郎大夫氏治大田帥法眼以下御家
みハハけあういさうらハ宮乃御供仕らん同音念
佛とあへくつ及了皆腹を切と云里
事記一秦武文の奮死のを録を然也共御画
御首を京へよせまうけるを尊氏禅林寺に迎まら
世夢窓國師を導師とて葬儀を修りありと云
寺ハ

今永觀堂と云南禅寺乃北若王寺乃南了あ里當時を
てハ今乃宗改め西ハ瓜乃浄王宗たり夢窓國師乃
居ハ禅林寺と号さう龜公法皇の離宮と成不及
禅林寺を今乃地了後たり然也と云後齋乃谷を唱えく
龜公法皇を禅林寺乃御皇と號せ御皇乃離宮を改て
南禅寺を造營ありハ世ハ齋謹中書王乃履歴を
唱ハ齋く禅林寺と稱さるハ世
編次ハ草里竊了考ハ高貴皇胤乃旗旒を廉一干戈
を執く三軍を引入王五瀬命日本武尊等ハ邀形王
迎くハ高倉宮後鳥羽院順徳院無禮を匡ハ不長を討
せら新くハ頗威烈を示さ新くと云ハ其事敗るハ至
てハ手を束絲く仇乃進止了就をよハハ慨歎痛惜ハ
堪中書王風月ハ嘯詠ハ悒鬱く居諸を送ら給
人當くハ唯閑雅乃貴遊を感賞ハなるハ元

師乃任了膺く東征北伐力を竭せ身死後了止其
意氣悲壯慷慨真子高驥虬鬚乃將軍と云と過へく
南禅山畔何乃處らあは王乃佳城お分往事を思暮く
躊躇去お思ひま

宗良親王ハ正和元年壬子歳了誕生あり備一
元亨乃初
妙法院性守僧正天台座主百十二代俗姓ハ乃室了入
世多御得度乃後乃尊澄法親王と申けお元徳二年
十二月十日善法院法務權僧正慈嚴了代了百代の
天台座主了補せらるる三品了叙了あ御年十九あり備を
然るお元弘元年八月廿四日主上山門を御憑あり
登山あり備け色ハ尊澄法親王ハ時乃貫首あり殊了

御門後乃内了別勅を蒙り了若も多く護心院僧都格
金妙光房阿闍梨玄尊等志を以て守了り大塔
乃尊雲法親王ハ御了り御座のりから以前座主あり始り
大儀を思召了り奉人ありあおは其曉直了り八王子へ
御上あり了り錦乃御旗を奉ら了りけ色ハ西門主を援了りと
之百騎あり了り馳集り了り既了り六子餘騎あり及
へり町程昇り了り八王子と云と並了り同日八日六波羅
より里に十八了り乃備了り畿内乃勢を差添了り六子餘騎追
手乃寄了り赤山乃麓下松乃邊へ差向了り赤山今
波羅より了り至了り二里許あり了り不動雲母坂を經
て西塔了り了り道に五十町不遠了り然も嶮岨あり了り
く並了り行へ了り寸五子餘騎あり馬を揃了り行了り進了り

多し魚鱗一歩六十人を列ね五百歩了五千人を
へし即前後相距一五百歩今乃八町余を隔りと思人
へきおまに他共出山門了仙躰を慰さし一乃五日了
六波羅へ聞つらんお色とも六日六日六日乃三
日ハ評定と合戦了度了暮し漸大八擲子へハ佐々木三郎
判官時信海東九近大夫將監長井丹後守宗衡允後前
司貞知波多野上野前司宣通常陸前司時朝了美濃尾
張丹波但馬乃勢を帥了久く七子餘跡大津松本を經
唐崎乃松の邊へ寄りけり坂本お兼之用意を
とあせの圓宗院中乃坊勝行房おと云早里雄乃若大
衆三百人許唐崎乃濱お出向ふ海東是を見く敵ハ不
勢ある後陣の勢の續りぬ程了馳散さくそ叶ふは
進めや若とゆと云すふ三尺七寸乃若刀を後射向乃

袖を差ひせ敵の渦巻くおつる真中へ馳入敵ハ人
切ふせ波打際お馬をひく續く味方を待ところへ固
本坊乃播磨堅者快實たるは是を見く二尺八寸乃
小長刀水車了廻く踏里ハる海東是を弓手おりけ
甲乃鋒を真二了打割んと片手打了打けお外へ
袖乃冠板より菱縫乃板まく片助違ふの事を切く落と二
太刀を餘里お強く切んとて弓手乃鎧を踏折れ五六乃
既了馬より落んとしけるり乘直里けお不を快實長刀
乃柄を五乃ハ内境へ鋒あうふ二乃ハ透るおかく
里けるふ海東認以喉管を突お馬より去通し落お
快實頼く海東の總角了乘り首搔切く長刀お貫

武家乃大将一人討ちて物始りと脱くあき笑て其立
大里けふ爰不見物元乃中より歳十又六計ある鬼乃髪
唐輪を揚をふら鞠塵の筒内より大下乃側高くより金造
乃小太刀を抜く快實乃鎧乃鋒をきくうふ三打口打そ
打つりける快實きつと振返り長刀乃柄あき太刀残す
落し継止んとせし如を比敵討乃者り射ける横矢ふけ
兎胸板を法と射貫せしるるふいより死ふり後誰そ
と尋ぬせし海東り嫡子幸若丸とそ知せり海東父子
討せし寄平引色り見えける如り本院乃大元七子餘
人三宮林をおり下り和泉片田乃者ともの兵船之百餘
艘壇あしぬ海に備あしる六波羅勢の後を遮んとせざるを

見く滋賀乃阿魔堂乃前を横切ふ今道ふかき引返
を危後を案内者あきハ爰彼乃法ありし落合く散々み
射る海東り若黨八騎波多野り郎黨十三騎美野入道
父子二人平井九郎直從二騎谷底みし討せりり
佐々木判官も馬を射さきく脱み討せぬと見えけるを
若黨とも返合せるるふ万死を出く一生ああ白晝
み京へ入ふりりかきく山門初音乃軍ふ打勝事始り
悦入を斜あし皇居を東塔了後しをふつと西塔へ
中送りけしし即鳳輦を催せしりか折ふし烈き深山
風り御簾を吹よきみ隙より龍顔を拜しとせしハハ
らみ至しあしりみ海きん尹大納言師賢卿 花山院内
大臣 師信



乃男男彈彈乃乃乃乃故乃故衾衣衾衣を着着て入入りてりて其其有有け
るる乃乃乃乃大大納言納言とと納言納言をを醒醒す院院々々谷谷々々へへ走走りり取取りり出出す
乃乃乃乃大大元元氣氣を見見る興興をを醒醒す院院々々谷谷々々へへ走走りり取取りり出出す
を披披露露せしし不不ふ糸糸後後乃乃乃乃元元徒徒不不替替しし殊殊上上林林坊坊阿
爾梨爾梨豪豪養養元元末末武武家家了了人人をを寄寄しし妙妙法法院院のの執執事事安
居居院院乃乃乃乃中中納言納言法法印印燈燈後後太太平平記記小小大大塔塔宮宮執執事事不不地地る
を捕捕ま六六波波羅羅へへ出出しし護護正正院院僧僧都都獸獸金金ハハ王王寺寺乃乃乃乃
の本本戸戸をを固固めめたりりハハ角角々々ハハ叶叶まましし也也思思ひひんん同同
宿宿子子乃乃乃乃者者をを引引連連る六六波波羅羅へへ降降る是是をを始始とと一人
落落二人二人落落おちおち乃乃乃乃引引けけ分分回回今今のの先先林林房房律律師師源源存存妙妙光光房
小相小相摸摸中中之之坊坊乃乃乃乃惡惡律律師師之之口口人人よりより外外ハハ落落止止る元元徒
也無也無里里けけ也也ハハ廿廿九九日日乃乃乃乃夜夜半半不不及及るハハ王王子子小小海海火火を

あまあまくく處處ふふたたううせせくく未未大大勢勢乃乃乃乃終終里里たるたる由由を見見せせ戸戸津
乃乃乃乃濱濱よりより小小舟舟りりめめせせ終終落落止止る所所乃乃乃乃衆衆徒徒之之口口人人をを召召具具
せせらせももややろろ石石ふふハハ落落るるをを以以てて震震ああくく西西門門直直一一所所ハハ落
ささ勢勢玉玉ををんんままのの計計略略ささるるぬぬもも終終るる分分上上妙妙法法院院乃乃乃乃宮
ハハ御御乃乃乃乃歩歩由由ハハ以以ててハハおおりりままるる終終るる終終乃乃乃乃邊邊りり御御座
へへまま申申ああくく笠笠置置乃乃乃乃岩岩窟窟へへ越越せせてて玉玉へへハハ大大塔塔宮宮ハハ十十津
川川乃乃乃乃奥奥をを志志しし乃乃乃乃南南都都乃乃乃乃方方へへまま恐恐るるせせらせ終終るる終終乃乃乃乃置
置置乃乃乃乃城城臨臨るる主主上上六六波波羅羅へへ遷遷幸幸あありりけけ也也ハハ妙妙法法院院宮
也也ああかかくく六六波波羅羅へへ入入御御あありりけけ也也ハハ相相摸摸入入道道崇崇鑑
るる計計ひひととくく讚讚岐岐へへ移移るる糸糸らら也也皇皇乃乃乃乃御御座座乃乃乃乃警警固
ハハ長長井井允允逆逆大大夫夫將將監監高高廣廣ううけけ玉玉ととくく元元弘弘二二年年之之月

八日都を出さ勢多ハ十一日乃晚程不揚律國兵庫乃
津入着をら建震より御船を奉りて讃岐國へ渡らせ
多ハ寒川郡志度寺了同二年六月より御座けり
上都へ還幸ありぬと同食居りて上治中備けし御
公務元弘元年の儀了違ををら新へりてとと重ね
宣下乃沙汰了及も此以せ乃月廿二日拜堂拜賀とけ
仍もをら也を建武二年二品小叙し延元元年正月
工山門へ臨幸あり一ハ之塔乃無徒涯分乃力を勵
て奔走し事里けり猶も其心をとらんとハ嚴慮ふや
ま一備けん宮小一品乃宣下あり
明雲備正ハ嗣々天皇座主第五十六代乃歷了昇皇
ハハ無品覺法親王
ハハ無品覺法親王

て任をら也一程了大法師位あり法橋あり僧あり大
僧都あり皇權律師あり權僧都あり法印あり大僧正あり
皇一宮からせ二品法親王ハ天皇座主第七十代
性法親王を始と一品法親王ハ此勳證法親王を始
ハハ徒ハ少く忠款を竭し勇士類ハ軍機を運せと云
やハ帝徳天心了乘けりやハ上糧米ハ盡たりし
あり十月九日尊良親王を越系乃國へ尊澄法親王ハ
遠江國乃井伊谷乃住人井彦次郎景直井太郎直貞等
ハ先陣并せ琵琶湖を渡分濱生来りりり義濃路を徑
冬河國賀茂郡足助重春了館了入を多ハ遂に遠江國引
佐郡井伊城了移里多ハけり同二年夏の頃ハ伊勢國鈴
鹿郡一瀬と云ハ乃奥ハ
太越了伊賀國柘植郷
ハ至る路乃存あり

公院を御出あつて廿二日了少和國內公へ入御其後
吉野へ臨幸ありし早に年不成ぬせの都へ還御を祝
させく谷より出る聲聞也との縁せりあふあへり又月六日
了准后勳子尊澄法親王乃繼乃御許より葛蒲根了そ
へく
と記く我々のむん乃深き江子引る葛蒲の根との知南
と依らせし御返事よ

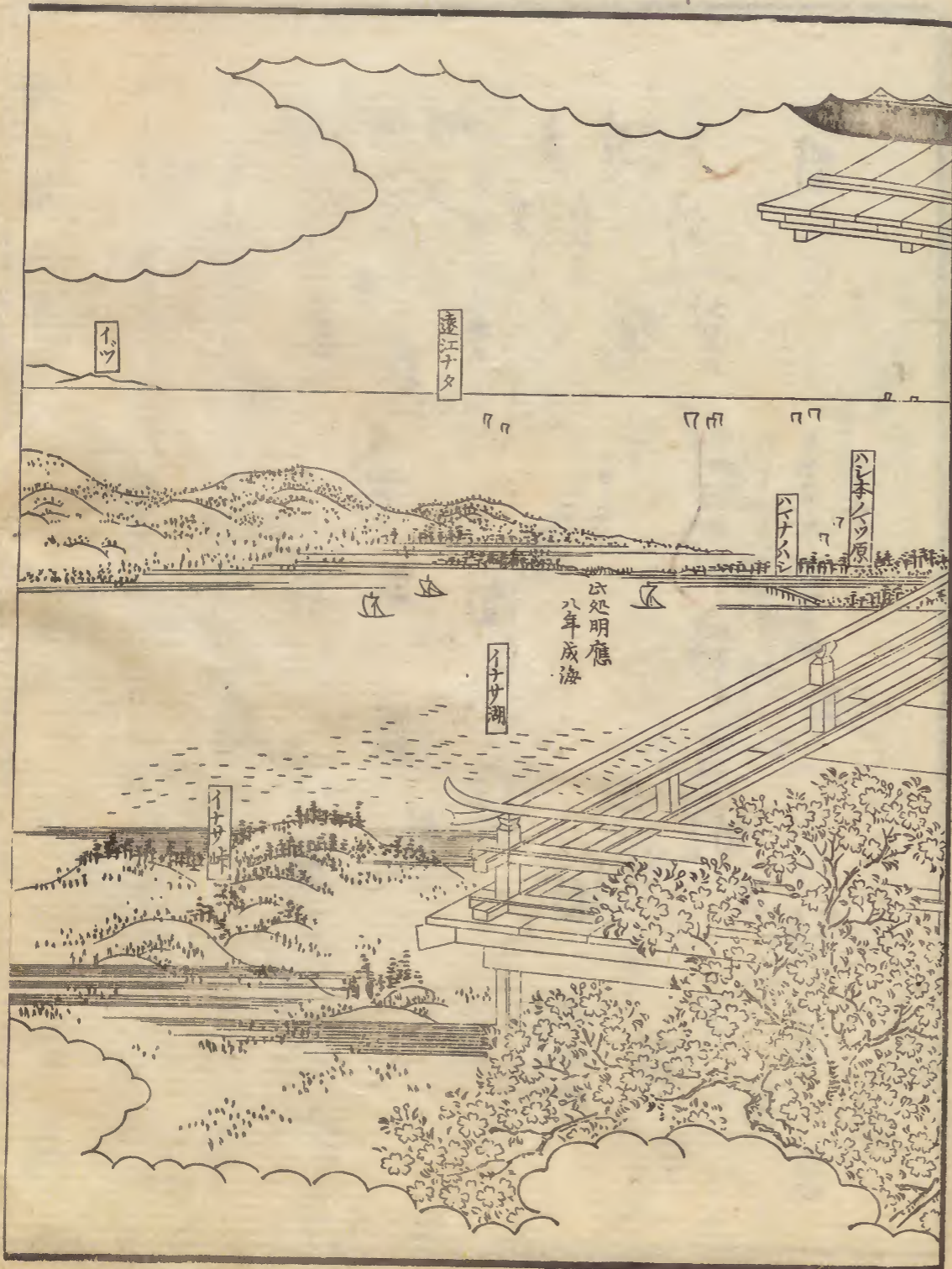
深き江のふれを以てあるあをめ子君うん子引と思ひ
其後准后乃御方へ系らせ玉ひたりし葛蒲乃御款を
肉乃御方後醍醐より仰らせし御物候ありしとかや
款とよみく延元四年乃三月六日乃頃尊澄法親王吉野へ
まゆきしと明らふあはれを延元三年九月義良親王

と書り伊豆乃三橋ふく秋ふありし御東乃
と玉ひしと云ふ乃の語あるべし
つころ沙汰せしを玉ひし御返事とありしとく伊勢國より
了乗を江を志し颯せ玉ひけるふ天龍乃灘と云ふ
浪風あつてあり二三日沖ふたふはせ玉ひける傍
白輪乃漆遠江國藤原郡乃海岸今白羽又と云ふ
揚らせ御衣ふと潮たせせ玉ひしは

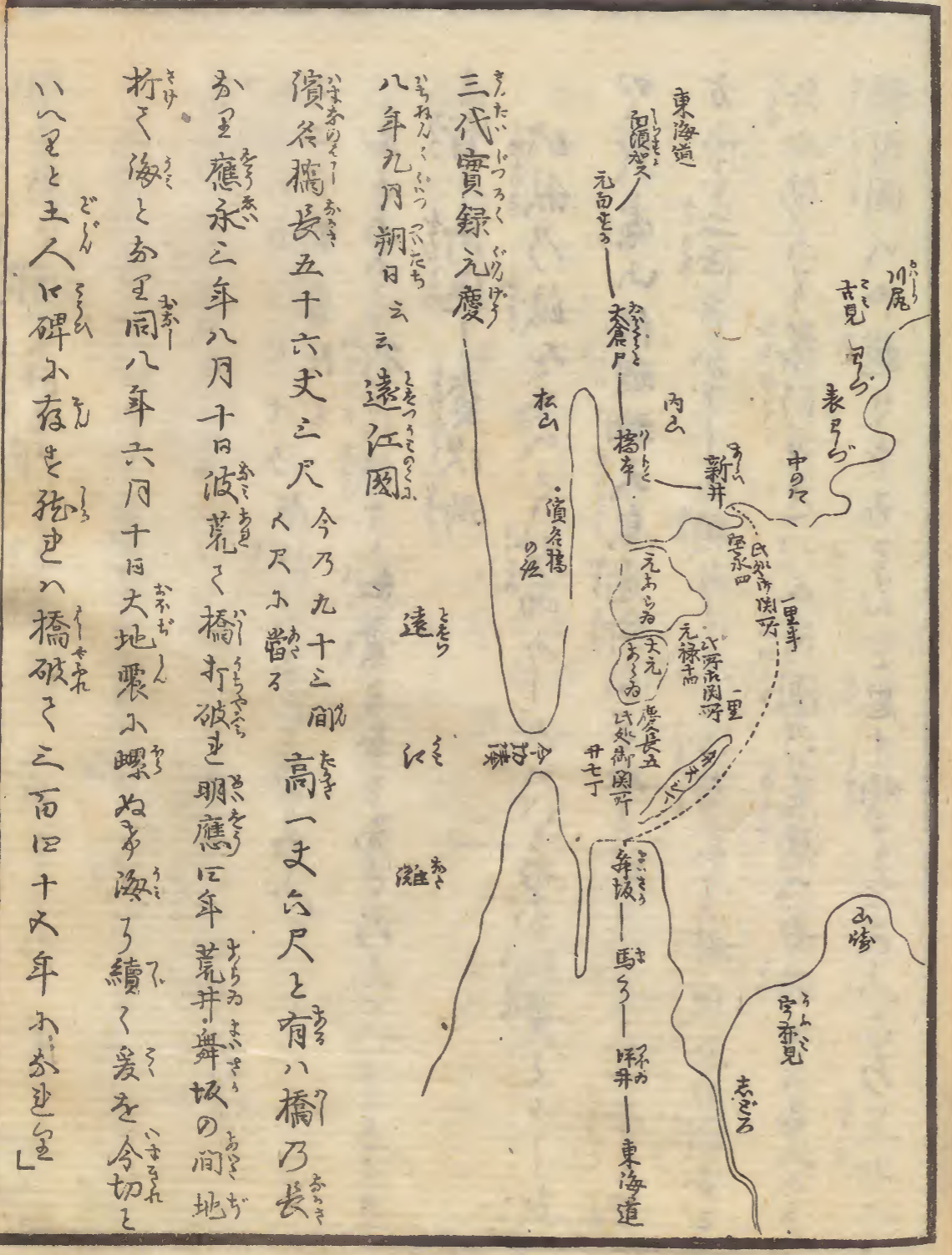
いづくを物と玉志しは苦厚片を神乃よる乃浦浪
義良親王尊澄法親王と云ふ伊勢より出帆ありし
一の伊豆の三橋ふく難風を過し天龍灘と云ふ難
地同しからぬ一時乃とあらざるに云ふ難ふ
と木花集了依りし其證を詳しと云ふ爰よ
里陸路を井伊谷より入御ありしは往歲に城入在りし
る時井伊介道政より女小親しと云ふを給ひ男王一知

生ありけり今年に歳了あり勢あ入り反官乃入を
入を義しく愛するを出入を街境
かき入けるに夜より旅衣ああつま乃嶺の嵐
かきまはく住をよひけり乃柱のまき入
日阿乃あきき乃柱うりまよあひかうや住おれん
又あ教を乃障子不
旅衣あふけり年をあまきとよあ新ぬる里の人の知境
かと詠興まきまひひく延元五年乃春井伊乃城よ
里濱乃橋乃覆りく里橋本乃松系湊乃波のきく遠
まかと見りくま新朝暮乃くまを御境
父くれの湊まきこと白菅の入海けくま玉浦教をり

はるくと朝の塩の湊あき出教くハのゆきま
秋印本集子延元四年の春と書き教を去年乃秋
寫遠ひみく延元五年あうての事實かかまき
吉野を出き勢あ入りとまの御還俗乃次ああまき
御名由宗良と改めらる征東將軍乃宣旨あ里けり中
國乃軍兵あ下まきける令旨あ載らまきハの信濃甲斐
駿河上野越後越中あとり隠居くま新田乃門葉
をまあ官方乃勇士を騰蛇乃雲を待得たる稜威をま
あまのりけるまきとま諸國關渡乃往來容易く守あうま
皇天 去年八月十六日吉野行宮了崩御ありぬる
一と漸あまハ八月十六日あま開けりまきとま更ま信
と思まきハ日敷まき教うち何方より乃音伝も同一悲の



濱名橋及井伊谷引佐湖邊圖



駿河乃之開えける内を去年乃十二月をさへて下ける遺詔
由ありける紅葉を一葉の具く別當資次卿 日野資朝 資明乃弟
延元四年八月十六日乃許へ中々勢あり
おのふゆ特色儀を紅葉をかきあて乃ふはくを
と有る河邊に資次卿
秋乃渡をく時雨のふらふ紅葉とて
の敦處に後醍醐天皇崩御ありぬと披書有る今と宮
方ふ二心ありと頼り人由心替去て井伊谷の城ある
兵ぬけく了落約々色ハ三河國乃足助へや後らを助入る
駿河國へや越々を玉とんと思へ頼りを助入る足助乃

重春の城へ移したる人々中々さへハ
一をちと思ひ定めぬハ橋乃雲をふかけく去るハ
と所ら移ける處へ駿河國乃入江蒲原等御迎了衆は
ハ駿河國へ移らせ入る其頃征夷大將軍興良親王
官乃御子延元四年征夷大將軍とあてせ玉へ皇尊氏卿
ハ能征夷大將軍と稱せしは後了地朝乃宣旨に依り
夷大將軍了補せられ然色ハ同狩野介貞永乃許し御
嚙征夷大將軍二人有るハ
座け色ハ三喜五ハ一富士乃根方みる朝夕乃煙巾峯子
おひくハ地乃せきせ入るとくハ乃姿を繪し書く為定卿
乃許へ侍りハさすく
みやまやあつらハ更ハ一とのをハ及たぬ富士乃たぬ成乃
為定卿乃返る

思ひ居るがごとくそかき言乃紫の及ぬぬりと聞てはけても
又大塔乃忠雲僧正乃許より下向あるへき由中されの是共
徒物六月日過けしハ

清見瀕か之乃聞ゆる隙ハあり松といはけしハ三穂乃浦風
かと仰らまけしとハ遂に下向乃とあり年乃辨ハ改里々

興國と云 延元五年四月廿八日を興國元年とせと元弘日記
不見也るを云しといへり 和淨命運本朝年鑑等延元

二年十月五日改元 同二年乃秋の頃よりけ處ハ生けし
とせりハ誤あるハ

とハ味方ハ素る勇士ハかく斯くの勵く後事ハ有へき

ハあり甲斐信濃乃聞て出所ありて勢を付玉のハと申

者ありけしハ立出まるとハ特野ハ貞永をもちハ二心あり

兵とハ召集らま終夜約束乃とと語らハかり日比佐せ

あひける處乃ハ龜子書付あり

身せハふ發河乃海乃おと乃浪より入かるとハ立たかれハ

虚谷を深く出させハ沖津あり夜ハ不乃くと庵務乃

松原冬朝霧乃絶間て露也清見と聞乃戸ハ有咽の月

了あけたくと涉免と

東路乃末まくとたぬ庵務乃清見と聞ハありこの勢をふく

浮島原より車返と云里ハあり甲斐國ハあり 宇津茶よ里九

九子より府中へ一里半府中あり江尾ハ二里七町江尾より沖

津へ一里二町沖津ハ車返まると十里廿町あり車返と云ハ

今津津乃甲斐國ハ入をまるとハ富士乃北方を過まると

あつるかハ南ハあり今日ハ富士乃麓を歩めるとらん

まくと甲斐國白頭 巨摩郡臺原と教來石
との向る白頭村あり 乃松原より体らハせまハ

て地地乃根原分
麻のや

かきそめ乃紗（ち）のちとの間（さ）ふといさやあきき乃松人（まつひと）もあ
信濃國諏方（すまがは）乃望里着をふひく宇津谷（うづのや）より御送（ごんをく）りふ系（まへ）一
者（もの）と子を送（うけ）きせふ入（い）とく

富士乃根の煙を見く（み）も君（きみ）とへよあき向乃嶽（たけ）のへう燃（も）ると
爰（こゝ）より新田乃氏族乃住（すま）と間（ま）をく越（こ）後國寺泊（のくにのうら）乃島郡（しまのくに）後
あふく歸雁（きげん）を閑舎（かんしゃ）く

古郷（ふるさと）と間（ま）く越（こ）路乃空（みぞ）をくは狩（あそ）うらと茂（も）くゆる（ゆ）り金（かね）
北浦（きたうら）より後醍醐天皇第（たいてい）二年乃御息（ごしよ）をむく入（い）入時（いりとき）
思（おも）わらふと乃八月乃秋（あき）の月（つき）よりくく後（ご）とくぬる（ぬ）御計（ごけい）
遂（つい）に興國（きこく）四年より越（こ）くおとゆも終（は）り

四ノ七

何（なに）にへふゆきとるへくも何（なに）もぬ身の越（こ）渡（わ）の冬（ふゆ）を二年へぬらん

以（も）て二年乃間寺泊（まのうら）より越（こ）中國名古浦（ななこ）射水郡（さみづのくに）乃石黒（いしぐろ）り

館（たね）入移（うつり）り北國乃官軍（くわんぐん）を指揮（し）かきせら終（は）御勢（ごせい）あきやく

之（これ）越（こ）る振（ふ）ひくは吉野（よしの）より勅使（ちうし）を下（くだ）されおとりのふあき

信濃國乃番帳（ばんちやう）高宗（たかむね）より作（な）り申（まを）あつりふ黙止（もくし）やく思（おも）ひ

めく同（どう）又二年信濃國伊奈郡大川原（いなな）高遠（たかとほ）より遠江（とほ）と云深（ふか）

公乃興（きみ）へ移（うつ）らきふひける味（あじ）方（かた）ふあきる兵（へい）もあき又何（またなに）と

待（まち）る期（き）もあきりくか

不言思（いふな）ふ谷（や）乃ふ小苦（こくる）きき必（かならず）を埋（う）木（き）とまき成（なり）たり

正平（しょうへい）之年高師直（たかのり）吉野教（よしののし）を襲（おそ）ひたり乃宮（みや）ふ火（ひ）を放（はな）ちたり

也（なり）の皇居（みやうきよ）を宍（し）生（せい）ふ後（ご）新待賢門院（しんたいけんもんいん）塔尾（たつお）御廟（ごぼ）

乃花を一冊を以て文小包に包みかえらるる之を芳野に見ては非ざる
荒みろく仇おふ花に於て跡とゆふとありと云れり

今見くも物お抱ふる形をわたり君の御教や花入をらん

同七年新田元少將義宗同右兵衛佐義興脇屋少將義治

越後上野乃軍を起し足利尊氏乃鎌倉館を攻ける時小

宗良親王ハ信濃國乃官軍を發し碓氷嶺を越し武藏國

小手指原武藏國入間郡北野村誓廻り橋小指原に於て臨軍兵乃小

をさきせけるも今日乃軍不勇を顯せしに依りて序不

君乃ため身のため何る情らんまじく甲斐おふ命おまじき

能る小新田氏族志勇餘ありて義烈疾風乃如きよ不親王と

將勸機を動し玉ひりの義興義治西將軍進み鎌倉へ打入

九ノ廿八

足利基氏尊氏を追落し義宗を尊氏を牛濱美濃郡

北半邊村或に不棄しかとも輕銳乃驍將遂に隊伍を亂し

後援のこゝに退く笛吹比企郡將軍不庫し玉ひける不

尊氏もく大軍を揚し襲ひ來り戦ふ數合し及義宗越後

をさき敗走しけしに親王も碓氷を越し信濃へ入り

此時主上後村上天皇賀名生乃行宮を出御おまじく東條

不鳳輦を廻させ居るも住吉乃津守國夏の家を以て御所

とあさせされし男も臨幸すく京都へ北畠准后を

差乃を洛中乃萬機を執務をまへハ此期をたし以宗

良親王も信濃乃官兵を引率し子合を合せらるへは

宣旨をかきせしともし君干乃國郡を隔しハ事神速不

宣旨をかきせしともし君干乃國郡を隔しハ事神速不

行々もと一日くと過しむにけふ内ふ湯川庄司矢野某等
謀叛し男ふ乃御所を罷以奉呈けしに上南都へ遷
幸ありし漸賀名生へ還幸すゆけるに聞えしよよとい
ましく御方なき涯分乃忠を致しける者小儀ふ替
て敵り馳加るしけしに兎角まる間ふ又二年三年とさ
正平十年ふありぬ爰ふ信濃國諏訪經御方ふ兼
國中を催しける仁科乃一族佐野門葉我少と馳
集呈親王茂近より鎌倉へや寄ん遠江之河へや打出ん
かと軍議區くあ呈ける時親王下諏訪乃寶前ふ通
あをを移入けるふ湖上乃月くゆかく秋風いりし
あはしりか

諏方乃海や神の誓乃いあ色の秋さく月乃氷くくら
強ふ仁科と諏訪と先後を争ひ遂に互ふ偏執を起し
仁科愈々軍兵を引か越後西へ立越新田と一手ふあ
程り信濃國乃習こし雪いりし早降る色に他處へ打
むし討つく諏訪あし年を越せ玉ひ明に正平十一年
より越後信濃軍兵を召具せらむ本曾路を美濃國ま
よりをむひけるふ御方乃兵氣振を所せに思ひく都へ入
むに北野天満宮へ百首歌よむ法樂せまを入中ふ月を
大空を照らす月かあれぬ乃光あを秋とおし入
正平十五年正月征夷大將軍興良親王謀叛を起し賀名
生乃行宮へ火を放ちあし西入りし上
後村よ
住吉
天皇



宗良親王
鳴海濱
を過る
信遠乃
兵を
催する

信北園

九ノ廿

へ皇居を移さば興良乃職を停めらば宗良親王を征夷
大將軍よりかきせ給ひて

おのひをち子にあらせりて梓弓おきりて我身かれんものとい

實ふも圓頓止觀乃學乃窓より螢雪乃光を集められん

御身よりいつりて甲冑を著せらば朝暮より馬より携りて合戦

乃機變を宗と推せしむんこと思ひゆるぬ御事あるを

ささくも有へきからぬ諷訪高坂以下の官軍を催し

住吉乃皇居へ赴りせらばんと御んをりて早らせらば

かとも磐隔より境遠く思ふまふも軍まきまきりて

よ里又伊奈郡大河原より屯りて於御方より兵を召し

ハ更科乃里入住せしむる

諸共了るをハきく山を越ぬとの都ふりてせりて乃

方といふて色むひんもりてや本曾路乃河音高く

み咽ひ浪乃氣色ん初けあるを御覽し

本曾路川よりたへ瀬より浪からんゆめりて

かとも興をらばそれより惠を土波かとりて義濃を公を踏分て

尾後國犬山より鳴海乃浦入後里住せしむる

山路より磯色乃里入りて浦めつりて旅衣をか

同十七年住吉乃行宮より去りて乃八月十八夜乃月面白

のりて見つらんかと作らば御製衣

年經ぬるひか乃夜居の秋のあせと月を都と思ひたされ

と有る御返事

いづせん月も都と光そ入表と之乃を秋乃ゆーと
月不表也ひ出たり秋とて我をたさく乃ひとあけく不
と中かた所をひ乃とて同女之年二月十一日主上住吉殿
あく崩御す御一かハ宗良親王ふろく歎ををまへとゆひ
かーやそせち文中三年入りり親王多うく告野殿へ
らそら色地景輪寺にて日野僧正頼景を導師としく後
村上天皇七回御忌を修りせせをひけること
幾春を散く見とらんうのりけか花も昔の別をさるに
天授三年まうく吉野不例候せをさる色又信濃國より下向
あか魚さく定めあく吉野を立出まひひ色とち路次不障の
一とあうく長谷新入をさる色あうくまうく御髪を剃して

さ勢ら色河内國石川郡山田村了隠色位を多弘和元年
御年七十ふあををまへ老乃御公を小あく所あかひの末の
世了遺ををまへんため元弘よりこのうく吉野宮にて抱いられ
たる御製ををまへぬ郷教上人あかハ武勇乃草隠道乃倫
女院皇后女御更衣いゝかとあまおまふ時あひけり云現
せか言乃紫凡子百餘首廿卷新葉和歌集と名付まひ
けるを勅撰了唯をら教へる由宣下あまけり十二月二日
奉院せををひしと其後終了信濃不御下向ゆあく
此山里あく豊す備しき今山田村六谷と云處ハ昔處
殿谷寺ハ宗良親王御居乃地あかハ中云傳入色ハ今現
存十三重塔築ハ親王乃御塔なること疑ひをいせま
親王乃御子尹良親王乃御傳ハ別不出ま

欣子内親王降誕乃年凡を記きそのを見以秋歌を御
母方乃流を汲をよへ前裁乃霜の色を御覧し
霜の如く子種の花乃離る秋よりより哀なり
と詠みよひしと又永和百首歌ふ歳暮を
もむくと思ひし年乃末の松老乃出持やましく越事れ
よよ梅をよひし歌の新續古今集みく世番くあせ
吟賞を後ふの尼とあうさらき嵯峨乃今林くも梅
就尼と中きしとかや
瓊子内親王ハ欣子乃妹了す酒と云と云御年の程
詳らあらき紅梅乃枝つつけ場子内親王後二条院
許へ遣さきけか御歌乃皇女

ゆきゆき風乃つるよ同色ねの白入甲斐あき宿の梅枝
場子内親王乃返り
と云くあき見る甲斐もあきさしゆを也他入隔ぬ梅の白
と云贈答新續古今集り載ら也たり
御即位以前子薨よひしは后之位を贈らよひし
されの宗良親王子首歌を為定卿乃許へゆりあくと此
贈るよ乃をよぬ後を絶し
散るくは梅乃杜乃名抄そとあき海いろ乃と乃を
と詠みよひしよも也たり
女御ハ之位を贈ら也仁明天皇乃後原贈皇后澤子
乃承和六年四月乙卯ハ卒き時從之位を贈らよひ

リ子を始とあまると云と小桐壺女御乃たりふ引をこれハ
謀かたぬ人ハありけふやたゞ皇太子即位ありて乃賜
位ハ各別たふへく権大納言局も後二条院ハ事あり
と云と小命婦乃朝冬禁内礼式を典を以て宮闈ハ侍を
去る迎ハ牆有茨乃識を免つ魚一其所生のそりく文と
武とを備ふハ母氏聖善慈訓乃敷及とありかふ魚一
先進補像玉石雜誌卷第九終 男信北圖畫并校

官許 天保十四年閏九月廿三日

栗原孫之丞信光藏板

